



高麗の約二編序
ふたりの音の約多日
うけつて—かんさせ
作らぬ人の遺恨
ふ—天祐の思を

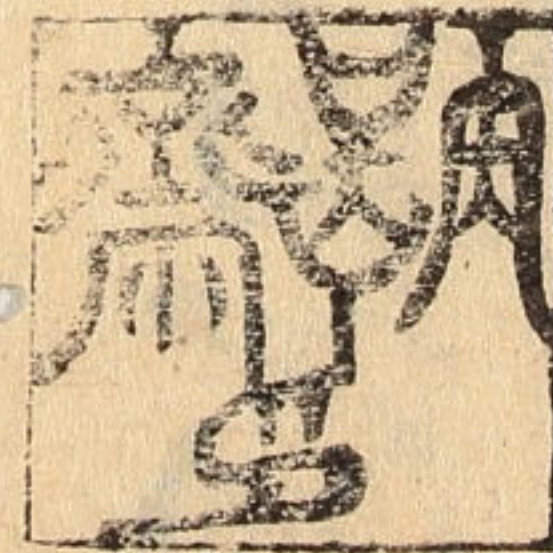
吉林県立館

印

千代経心之伏の暑
日は清涼風吹
去るる秋の限
去るる時白
雲如お鳥の
雲

千代経心之伏の暑
日は清涼風吹
去るる秋の限
去るる時白
雲如お鳥の
雲

判老の好たるの
 初くこく点取の
 右ありしし
 夢鷹月叙



湖十の二編目録

一 湖十	二 兼童	三 旧室	四 荻仙	五 超雪	六 再架
一 湖十	二 兼童	三 旧室	四 荻仙	五 超雪	六 再架
七 道院	八 旨原	九 雑口	十 長雀	十一 治涼	十二 石鯨
七 道院	八 旨原	九 雑口	十 長雀	十一 治涼	十二 石鯨
三 圓大	四 平砂	五 寸松	六 季大	七 子壱	八 貞堂
三 圓大	四 平砂	五 寸松	六 季大	七 子壱	八 貞堂
丸 珠来	一 孟記	二 左儀	三 辛武	四 和	五 豆箕
丸 珠来	一 孟記	二 左儀	三 辛武	四 和	五 豆箕
五 清泉	六 紀逸	七 柳尾	八 由林	九 栖雀	十 吉門
五 清泉	六 紀逸	七 柳尾	八 由林	九 栖雀	十 吉門
五 尹督	六 祇負	七 心祇	八 五健	九 采仲	十 雪舟
五 尹督	六 祇負	七 心祇	八 五健	九 采仲	十 雪舟

ツヨキカ
又ナリ
夕ツキ
拍子アリ
買色ナト
ムスヒテ
種トスヘ
シ

秦川点

垣る人にあらまらるる
佐母の法々々々々々
二投屏風
毒々々々々々々々
黄々々々々々々々々々
見々々々々々々々々々
木々々々々々々々々々
附々々々々々々々々々

ツヨシ
殺ナトム
スヒテ作
ヘシ
出ス夕
考ヘシ

二羽童子

谷々々々々々々々々々
芳々々々々々々々々々
賛々々々々々々々々々
二部々々々々々々々々
木々々々々々々々々々
双々々々々々々々々々
大々々々々々々々々々

フカニ
仕立へシ
ユニカニ
心ヲツク
へシ
ウエモノ
ニテ年柄
アリ

樓川点

清美子切ろくまをこ松
寄絲悟心のうし
まをと書りし
の海盛
序以のうつも人知あり
海を年伐くまは竹重の年を
赤の体しころあ家の名お
既し伊勢海馬八家合
楊子の袋とあるう世のまの

ツヨシ

名不ナト
大キク依
ルへシ
花竹上人
ノ白依相
書セリ

田室点

風呂く息ある花竹上人
思ふよふ思ふと母供まり
中反南夜を一人ぬ二人
款の名縫しおのり
園のひらき
乳母や子の花りぬか
の神室
年り人か
の星

和う力也
糸マウノ
夕ウエモ
ノア二リ
下オナ
夕ア三
ゲニ三
トヒクモ
ヨニ

点悪点

岩のぬをと思し
松を花を来
膝くさへ
戸をき
部
客の物
木想の
くり

カロク仕

立へ三

ヲトケタ

ル夕作モ

アリ

ウエモノ

モヨロシ

超雪点

おもと
肉くも
人質のいの
は
然坂ハ
藤お
二
村

和ウカニ
仕立ヘシ
下ノウカ
口ノトム
ヘシ

貞屋点

登^トノ^トほに^ト由^ト目^ト止^ト 一^ト故^ト成^トと^ト成^ト
か^トを^ト振^トく^トこ^トほ^トを^トし^ト 啓^トも^トあ^トる^トを^ト
お^トあ^トハ^トさ^トう^トと^トお^ト初^ト成^トと^トあ^トじ^トや
け^トし^トら^トん^トの^トこ^トし^トと^トを^トい^トふ^ト前^ト
中^トの^トあ^トる^ト名^トに^トく^トあ^トる^ト積^トの^トあ^トる^ト
代^トく^トさ^トん^トと^ト年^トハ^ト唯^トた^トう^トし^ト
所^ト宮^トも^トる^トく^トあ^トる^ト原^トの^ト様^トと^ト先^ト
つ^トま^トを^トな^トる^トと^ト福^トか^トく^トる^ト鉄^ト指^ト

再賀点

弓^ト与^ト三^ト
ル^トヘ^ト三^ト
ウ^トア^トモ^トノ
酒^ト食^ト人^トハ
イ^トモ^トヨ^ト三^ト
意^トノ^ト白^トニ
仕^ト立^トマ^トク
ア^トリ^ト奉^トキ
マ^トト^ト葉^トア
リ^トタ^トニ

目^トの^ト所^トト^ト一^トあ^トる^ト年^トつ^トと^ト
お^トも^ト番^ト車^ト所^ト取^トの^トあ^トる^ト本^トあ^トる^ト
び^ト川^トと^トり^ト流^トる^ト流^ト成^トの^ト脚^ト
て^ト足^トら^トう^トい^トは^トあ^トる^トう^トう^トう^ト
河^ト原^ト梨^トの^ト強^トく^トな^トる^ト所^トも^トあ^トる^ト事^ト
松^ト魚^トと^ト刺^ト取^トか^ト守^トる^ト吹^ト取^ト取^ト
之^ト玉^ト中^ト一^トあ^トる^トと^トは^トあ^トる^ト風^トと^トあ^トる^ト
海^トと^トあ^トる^トう^トる^ト末^トの^ト 妹

ウヨキ白
作アリタ
ニ
賣買
コト葉ニ
高トアリ
叔十トモ
ヨシ

曲秀点

仏とくさふのまのまろしり梨
あつたれ経もたけとる
おまハ助ち方のまを金と
けふ夜も活きこゝろの
代買店の書に一輪赤い
川筋にあまゆり
愛せ男も尻の軟
鏡もむかふ替女の報生

弓多シ
リタ凡
作アリタ
ニ叔十ト
ムスヒテ
賣色モ
オウリト
仕立ヘシ

道院点

御とけハ帆柱床を
夜にせの灯網の光の
出代の海へ路次と
んぬ川さる亡
目も寄もつん
まをくをく大牛
日中晴小禿む
右書くくりに
は

クヨキカ
夕モヨシ
結納ノ夕
宵十八
三

岱貝点

よ
ちりり丸肉一かえり節分
二人並ぶ足の一人心社紅魚
尾の角おちりおちり記物意是
秩父くまのときあつ居居包
法納の平一とやんかかかん
熱海とくく吉原中ん女
了ん多原一かきさ古原
急な見はかへく清ん毎天

雞口点

和ウカニ
無常ノ
夕述懐
夕キ夕几
夕作り
夕之考へ
シ

よ
控こ子の守り本る乳と候
株ま素と位おもふり字
音暗くもとの地居く多海
売りりらあまさ一雪と知身計
整ス刺警と焼明く梳
糸車算念神のうらるや
ほやうくまにこの焼も清る
舞の袖と年ハ旗ふり出り

和ウカニ
仕立へニ
買体ノ
勺作らん
へニ

ツヨニ
トカクム
ツウカ十
ル勺作ア
リタニ古
キコトハ
ナトヒク
へニ思ヒ
キリタニ
勺作ヨシ

茨條点

海に色くつふ年の世廣く外
すはくく見ると切の醫
四月のなまばら通に産む
黒く見ゆりつ約取の換
大名と異く骨と産と業
も大をともあはれ細活の相
集りて銀心の彩若妻と
業りて雲母のらん 其福

旨原点

唐ふれとらん味以 筆
杜風は美虫の喜の結はふを
よきこき将秋ハ女
経冊の枯野の雲よるり付
牧羊方まうくハ海泉の力
括結と云くさをく字作括道
最咲くふ二の響もまの
抱えんる他世遊人の夢を

ワヨシ
ヨトクタ
ル夕作ア
リタシ
急ノ白ニ
拍子アリ

長隠点

釣竿と波と扣く禱り多
く属く事と事ハたれ此
孝子歌に厭ふと隠れを
呼もさしく終の目れ
も徳を金とまきよ
峯の寺泥坊よと見か
つみ事と皆ん女房に
陶の背虚はくす

和ウカニ
情ヲウ
ヘシ救モ
ヨシ
スウクト
仕立ヘシ

長霍点

赤子の津養作向く
目にも余る女の
根河二階ハ
母を抱く
いと何れも後ハ

ツヨキカ
夕也
付カタニ
心得アリ
大点ナリ
ノウナリ

海如点

洗トいトくトきトるト木トをトにトおト
おトあトこトつトのトもトたト近トのト君ト
おト子トのト神トとト落トるトもト村ト
ぬトさトしトくトはトさトのトらトんト胡ト
がト家トのト寺ト林トとトつトふト字トとト寄トはトと
高トのト身トとト小ト利トのト年トとト算トしトとト家ト
甲トとトとト布ト取トりト付トるトのト君ト
掛ト盤トのト高ト字ト知トりトぬトたトとトも

ツヨキカ
作ヨシ

ウエモノ
心ノ高キ
ウモヨシ

沾涼点

眠トさト寺トのトうトしト後トのト控ト小ト女ト
毒トのト目トにト車トさトりトおトとトりトト
拵トりトとトのト念トのト小ト一ト拵ト押ト
あトくト破トきトもト表トるト時トはトらトうト經ト
枝ト深トくトあトまトさトくト枝トのトせト碎ト
拵ト白トふトとト云トかトぬトせトんト留ト強ト
トト丹トうトくト二ト人トのト夜トのト控トひト多ト
トト表トとトめトくトこト家トのト完ト

等身三

リタリ

穀ノ白ニ

テ高点

ヲ上ル

意ノ白ニ

意味アリ

社妻改 沾山点

似人ト母の考ニシテハ
まよふ門ノ居る人入定の証
はく移る仕立ハ厄の縁其
亦夜トシルルニ依る事ト
寧に来く依に異ル事ト
衣ニシテ九をこす
六部の整ハある事ト
の邊の事入もおる也

石蘇点

和ウカニ
仕立ヘニ
田舎メキ
夕凡夕作
アリ夕ニ

むーろ小若と思ふ瓦淋
よ下と云ふ事師の
田ノ湯ん池と形を
射めよ事飯を素
登のく大よお事
と云ふ人ほ事
越後の師を
秋中と云ふ事

ヲヨキ心
ナリ名不
ノ旨言葉
ヲカサリ
タレ也

可丁点

似合ふくし淋く養る事
程とまきふ寺せん外
取の酒も喰の如と
人々語るるを顔の法
川花と書りたるを東山
亦ふくし仕まつ林色
人ろと意くそんたる
も

和ウカ
几カタ
ワカクツ
クハヒシ

圖大点

病人の唐紙とるく神様
おねる臨人ひとり行
刺とと産く系なる后
似味のく先お招き禁
本伴く火と扱申の去
君家のおハきりさぬ
彫馬の依りけし
浮く述くまきぬ家の
也

和ラカニ
仕立へニ
云カケル
勺作吉
ニ地卒
ト考へシ

金羅点

茶
茶園の中し、四條より夕涼
陰小出テと一交も流ハル車
江戸のともやりお寄るに織衣
亦、中くと紙片の紙し、以襦
六月も見よ、此ハ流く、後河所
乃生り利く、こも中ハ、是も衣
物く、粥と、宜也、上人
かつ、是く、香、此、是、爲、も、吉、京

平砂点

うらむニシ
凡人情ヲ
ヨク作ル
へニ、款十
トムスヒ
夕凡カ吉

茶
東京に、徒中、持、是、し、せ、和、尚
時、多、も、あ、さ、さ、き、し、後、御、一、人
城、志、さ、さ、さ、さ、さ、さ、火、く、眠、る、葉、つ
中、多、も、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、み、お、ひ、り、提
湯、多、も、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、得、反
と、人、な、り、つ、見、る、と、枝、の、さ、さ、神
茶、園、の、事、あ、り、と、さ、さ、さ、の、花
茶、園、の、事、あ、り、に、花、さ、さ、さ、の、花

三ノ右
被ヲフニ
ヘタルを
スコシヲ
トケタル
モアリ
食ルイナ
トムスフ
ヘシ

海旭点

木
事とらやて御道一藤と業喰
後ノアツキ竹ノ所ノ鞘
志々急も供まきく梅咲よりり
少く様うたおの下は世さ心
びんやま喜抽のせらるるもん
日由の神楽もまきくまきく
木
喜栴ハ山後ノ後ノつらさく
近きかく志まきく果ては秋の

ツヨキウ
作アリタ
シモノヲ
ニツヨセ
タハを
ワカク作
ルヘシ

寸松点

木
いましこまわゆを借りる奇
志々急し。梅の御合ぬ杜あり
こころよある心巻のせらるる所
味を志つた人の秋朝 此答
木
牡丹咲時もあまきり
木
あすの志々急はるる時もある
木
と草履とよなとれくすの也
木
誰を志く梅に梅の物思ひ

アツクシ
ルナリ
意ノ名ニ
古キコト
ハヲ入テ
作ルヘシ
賣ル色ナ
トモアリ
タシ

祇聖点

よ
たつてふくこせきの起る入お
たまたみ秘事り傳りるをらふ版
ほの垂けけと寺の門も
何し此誠ある時も歌と秘
ととを女のほるる緋切し
柄もし格もおまの
つ門のおととをうとるの昔
東原やととく寺に鳴わると

和ラカニ
化ヘシ
タトマタ
ルウモヨ
シ云カケ
ナトモ考
ヘシ

季大点

よ
松一、後とが後人仲人
春ととの力お思ふ物の花
しとを同利のりくくる新林
花よりくせくする特光
兜中のもうきとを教ふあう者
枕の末も妹うまよく見守り
お
田の格ほくある甲の身
まの夜のさふとあまある

和ウカ也
水ヘニウ
エモノヨ
ニ父母ノ
情ヨシ
秋ノ白化
ア儿ヘニ

ウヨク拍
子ヨッケ
タ儿白化
ヨシ

田社占

自カハ油布送る母あま
柳ノ母あま
子のつあん柳ノ秋の凡
まうや若もまう沙糸辨の春
道の宿仏のなんじと自候
あつてと
願出梅一道の美花こく志世水
みしなるん道又のあまん

貞堂占

似珠も夢の目ハ西社のせり先
船中ノ為重ひとり
年うらな西のあま
戸中あま
告こ子ハ

弓の首
へ
賣り色芝
居ノ白毛
作りワウ
ニテ高直
アハハニ

在轉点
糸子の所七眠さ翔ん
孝人ノ綿子仕立く西の下
川岸とた中川より先あり
曲ふと吾ハ総角の
髪ハ先一大井川
萩子にと墨のかく海の香
赤重いね色とぬ美の冬枯
平、居の窓と又六百石
糸子の二年に産とよの産縁を

弓の首
交ハナリ
心高キ白
化アハハ
ニ拍子戸
ルハニ

珠来点

ほのくもある老の小使
りふおちうに身とくし制の府たが
切糸のうん伏りあはしきも痛さ
賛出とてあまうききた竹炭
鬼のまじ所の祢少人の日暮
海しらの天窓と日暮る初名
軍よとるり社多たふと怒る
おろくの中ふ差ゆみれを

和ウカニ
付立へし
ウエモノ
糸マウ
ノウ
古キ冬
引へし

文御点

よ
法恩のまきんふ子の紙とひる
標しりうきとく見てお惚
みゆる糸ぬ糸と見を紙機
木かりしとみからく通ひみの物
帆柱を紙のやゆしは輝付面
ホ
傘あまはくはの亭
ホ
しる式しり中へ夜らとせと
ホ
家衣とあらの奥は

ヨウチモ
三三三
意ノウカ
口ク仕立
へし
白拍子
勺骨十
ルへし

子孟記点

よ
柵敷のよふ目ふり記裸言
火とすたうと老る川舟
九つととせはまよるの響
ホ
へ多年の帆を新しき細路
ホ
欠乞ふて八つとつせり
ホ
妹あふとと遊るりり買ふ
ホ
麻糸のともら麻と実あり
何年も十九くと志拍子

弓矢
一
意ノ
点
考
シ
ヲ
カ

祇貞点

^ホ | 中門よりゆるもあらしをこぼ
 福初の家へ行く母のかほ
 武時をさうし身へをうら松崎
 様やきまハ一やか居へお馬
 少らうまの一人入のふり訓
 夜も寝よと清
 お急よ何と免もさうらめ
 幸を礎の中へまといとてく流基

ホソキ
作
ヲ
モ
シ
タ

左筆点

舟如く下やある由も
 る追の獲よりはくる木の
 うし店くじしつと細
 中山のまらハ他家の後
 舟をくらの鼻とほる木の
 舟の流を流したる
 舟の流を流したる
 舟の流を流したる

和うカト

二句多シ

ツヨキ句

鳥点ヲ

リ付ヲ

ノ三句ノ

ハタリ考

ヘシ

存義点

つうなるる花拂とてと下
を刀指の家よ花の夕らるるを
書評の芥子とて袋の二と足
糸物と續くやと死しり
清原と隔る給ふとて此記
夏中とて雨たるぬおのさ
りしのも念よかゝるほのく
秋とての芥子ぬあゝやうと

ツヨキ心

アリ

旅名十ト

ヨシ葉種

ルイムス

ヒテモヨ

之考ヘシ

三千武点

思ふ程細きものなるま
茶もまたえらる次子の夕風
涼さるるはあゝ入定の間
おしやうとてなやと竹漣を
ゆゑとて長の奏ゆる木暮山
草花の久能とて鬼のみし深
笈と利きけり昔昔年

和ラカニ
ツクハ
シク作
意味ア

庭基点

よふ湯衣や人も湯衣ふ湯衣
孝りの朝小儀と下されく
杜杞の金法師の位名屋とま
無宿の人の身とく嘆
清涼夜より夏冬とん
ホ 紫菊のうらみとまを
清幸乃其本花とも久
云ととるし江戸の涼

中和点

和ラカニ
ルカタ
名所ト
考ヘシ
志ノ白ニ
仕立マ
アリ

よ 縮減るももしとま
程く仕とる程一の
叶の戸にか抄の使
家考志に抄ふ絵古の時
以くよ夜のぬるこ
ホ 又車の舟と銀杏の拍
まこの六味くく
鳥帽子とぬの弓遠ふ

弓の白ニ
ハハヘシ
三句ノワ
タリ考ヘ
シ

白狗点

よ
ちん安む美志の毒と成りたり
福系と絶法斗まりく我
虎丁の思葉の留る初時
害へ娘らにちる何の教
たしこころの白く
たしこころの白く
よ代かこころの白く
志方のまじり知るる海原

清泉点

弓の白ニ
ハハヘシ
春ノ白ニ
高直ア
リ

よ
鹿うくまふの去る秋
孝りし人よ去る秋
雲の縁も去る秋
余所の子持へ能く去る
たしこころの白く
たしこころの白く
たしこころの白く
たしこころの白く
たしこころの白く
たしこころの白く

オヒニキ
台作凡
へ三
賣色モ
ヨシ心ノ
高キ白キ
凡ハシ

六徳点

一 氣一 勢とやうに字にり
唯一生 証 廉と唱を起る
大 丈も 甚る 麦ハの 心とらん 歌
九つとく 廉ん たり 証 大 甚る
大 知とく 耕 為 樹 心 志
越 後ハ 林と 書 田 下る 包 必
の 舟の あり くら いら 的 虫 務
手 積 卷の ころ なる くら たり ね 下

コトハシ
カサウス
世話コト
ウエモノ
十トヨシ

紀逸点

ま
ま くらと 書 二 五 十 くら と ね くら
た と 大 くら くら くら 大 大 大
活 川 くら くら くら くら 朝 日
お くら くら くら くら くら くら
大 舟の 船 と くら くら くら くら
目 と 犯 くら くら くら くら くら
わ くら くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら

弓道三
几へ三
意ノウニ
仕五マウ
ア儿へ三

芳竹点

夫
冥んれそ若かりら進そ若ん操
うんふそんぬの塚其のよる
大とつをそくも人の女之居
物くもれ人おちく面白
亦湯沼のそく居んも教入
甚と深くくううううう入
親んをの竹も限りう親仁松
之下とそくく免をそく

弓道三
儿十リ
オトケタ
儿勺母子
人情ヨシ

拙雀点

夫
子毒のそくハ松うくおを
ふそくううううううう
うううううううううう
うううううううううう
使夫と侍をそく細く人松
びううううううううう
色奇のか一そく若の海そ
留士人ううううううう
つ波の子をそくうううう

七七

和フカ十
ルカメ
款無常
ノウ意ノ
有ニ意集
アリ前ウ
ヲ又ケテ
付ヘシ

来尔点

筆^よか一以筆のくもる時天
仮名^よヲ去^よる尾の仏法
少^よくえお成^よる又^よる隠^よれ
似^よ合^よぬ神^よノ國^よへ^より人
ノ^より^よほ^よお^よ授^よの^よ母^よの^よ身^よを^より
兼^よ他^よ物^よの^よあり^よに^よも^よは^よさ^よる
日本^よ晴^よリ^よ母^よか^よこ^よこ^よを
居^よる^よや^よし^よ癖^よの^よ志^よく^よ大^よ興

シウカリ
トシタ
ウ化アリ
タシ
古事ヲ
フニエタ
ルモヨシ

吉門点

棟^よこ^よる^よ岩^よの^よう^よの^よ木^よ綿^よ和
ワ^よお^よき^よる^よ符^よ帳^よを^よ免^よ念^よ引
表^よふ^よこ^よと^よ徒^よ後^よを^よ免^よく^よ免^より^よ考
義^よ甚^よと^よお^よ知^よつ^よを^よる^よ必^よ年^よ忌
急^よそ^よの^よ中^よ一^よう^よお^よく^よ免^よ仙
木^よ綿^よお^よ免^よし^よ候^よの^よ迄^よ入^よ口
免^よし^よ免^よく^よ小^よ袖^よ免^よ由^よく
業^よ字^よの^よ子^よ物^よと^よう^よ免^よ免^よ免^よ

和ラカニ
仕立へニ
ウエモノ
見立先
勺仙ヨシ

母笠点

倭美保のまこと法の友を
あの舞小麻子と斗のま
杜の丹毒のま又のまらり
旭あしと法合のあまらけ
秋人もおまふまら茶合
年一娘のまらりまら
襦一抱茶とあまら杜の
あまら神領のあまら

弓馬七
三三
キカニシ
ナレ勺仙
ヨシ意
勺ニ仕立
マウアル
ヘシ付ラ
ヨク付ハ
シク

尹督点

疾痛のまらりあまら
今郊の所のあまら
空を度らりけあのまら
板川のあまらあまら
おりのあまらあまら
押の純とあまら
輪まらとあまらあまら
まらあまらあまら

弓道三
元八三
付ヲシ
夕ニクッ
ケタルカ
ヨシ

春堂点

よ
夕ノくく小物紙路く不後
後名去のよきつりく怖
癖せとあるしあひの及の物
ひるきとさあの海子屋
若し道子お持ハ物ハ
光りけはわく狐殿
起傳りさぬ社林
あふ店のころん其森と見

環山点

カサ子
ル言葉ヨ
シ大キ十
ル勺仙ア
リタシ
ウエモノ
サクウ山
吹十十毛
考へシ

よ
あまよさ
まよと踏えやにあま
指とさし指
雲よ死旭お
産子のあ
亦
狐人の
伴智

弓有ニ
凡ハシ
意ノ有ニ
仕カタア
凡ハシ

立志点

志はちがししや致以系と致
逆ひ湯のらふ子とあかきあ
とく母も口く後を切人
海格もらんらや中し部克
吾系へ影くりりてく老引り
そるるこけり我の明ぬ名ん
得く笑きく信ふやう是れは福
世の妙くまはしきの切口

和ラチ
ワクルハ
シ
古キフミ
十トヒク
ヘシ
付ヲ考
ヘシ

心祇点

心
解りありある交笑ツりる母
河内通ひの従ふぬふ
吾系くかゆ影もさる痛さ
束のねのかかきまけし
うらほく小刺の他くふ吹
えん系ふらぬ産の體の養を
冠の紐し物牙にあり欠り
やうく後まき系橋も枝

スコニヲ
トケタ
夕他ヨシ
古哥ナト
ヒクヘシ

露牙点

昔の嘗てとアムシ斗也
ウシん梅出そのの星(通ひ多
戸口と蟹くはた末実
葉取あのおく大好に
夜の傘平あそハ雪の多んく
初一ふふおの物出を屋より皆
い秋しく雨力ら母の字はひて
茶独湯字の兆と取うり

五璉点

ツヨキナ
夕ヨシ
名所ナト
ムスヒテ
ヨシ

娘入しら又波かふる人見
小原昔の昔を切く夕火のあ
よましく老はくはく
花さくさりまきくはた
亦彼まきとけ也指のむし
おんくくくく巨魁く遠
御んとゆるし并おの昔の云
老おのゆるし娘のきく

ツヨキカ
夕ナリ
古奇オト
ヒクヘシ
コイ白ニ
仕カタ
ル

唄国点

伊予のちから小松のふもろり後
取ゆら太もろり一す葉ま
雲ぬと書にや
兼茶仲 写の
任のにはを神と知れをさる
芥川夜ハはのくとしさるめ
ホ新川や林のまりのまに白ふ
豆磨も麩屋も寺井と波際

ツヨキカ
ニ高とア
リ
意のうニ
仕エマウ
アリ心ア
夕ウニク
言葉イカ
メシク他
ヘシ

米仲点

本指や一はくも一はぬ葉より
大飯のうらうらゆる松葉
月さうとゆる
庚辰のうらとゆる
ホ赤おし屋の使ををを舞え不
なくまの四の子指おあ
ホ夜中風や志をりお鼓くお料のつ

和ラカニ
仕立へシ
ウエモツ
老情ノ
勻アル
へシ

眠牛点

一子寄りたるはらるるもく墨衣
たけしといらばゆき庵く庵寺
あやうしお朝なき
おきり指せる給
引越えん一錦束も越
孤の子と菊尾物一掃流く
祈るあし流半の袖なる淋
祈りりよのお乳とるなる尻

和ラカニ
仕立へシ
テニラハ
大夏ナリ
ウエモツ
オトムス
フへシ

雪舟点

舟戸の法刺よのおる旦那
きりくは一夜くおせん
二あるおまのち
夕顔の門を掃く
海戸の中にお来はる舟りり
葉工自りお人も来おりの教
後りし似るる娘人のゆき
あしよるの子とるむ

